HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	アブジェクトとしての少女 ――現代日本の少女表象へフェミニズム美学からのアプローチ――
著者	山田，萌果；YAMADA，moeka
引用	
発行日	2023-03-21

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

アブジェクトとしての少女
――現代日本の少女表象へフェミニズム美学からのアプローチ――

北海学園大学大学院 文学研究科 博士課程
山田萌果

要旨

本研究、「アブジェクトとしての少女――現代日本の少女表象へフェミニズム美学からのアプローチ――」は、2000 年頃から日本の現代芸術において描かれるようになった、アブジェクトの側面が強調された少女表象への美学的分析である。

アブジェクトとはジュリア・クリステヴァが命名した、秩序をかき乱し、境界や場所や規則を尊重しない、中間的で曖昧な、両義的なものを指す語である。明治から昭和にかけての少女表象は、一般に、清純かつ可愛らしいという特徴を持っていた。対して、本研究において注目したのは、恐ろしさや不気味さが目立つ少女表象である。近年の少女表象は、血や内臓をモチーフとして扱うことさえある。その点に、アブジェクトがある。では、少女がなぜ、アブジェクトとして描かれるのか、その点に本研究は重点を置いた。

少女表象に関する研究は、マンガやアニメの分野で一定の成果を上げている。しかし、美術分野における少女表象に対する美学的分析はほとんど行われていない。本研究は、その、ほとんど未踏の領域に、フェミニズム美学(Feminist Aesthetics)の視点で切り込んだ。本研究にフェミニズム美学を用いる理由は、フェミニズム・アートという女性の主体性を訴える作品群には、アブジェクトがあり、それは、女性の主体性の表現によって立ち現れることが既に明らかとなっているからである。この主体性の表現とアブジェクトの関連性を、本研究は少女表象分析に応用した。

本稿は六章立てとなり、各章において明らかとなったことは次の通りとなる。

第一章では、本稿の基礎となる、少女、アブジェクト、フェミニズム美学、の三点の相関性を明らかにした。まず、歴史学、社会学における先行研究から、本稿における少女の定義を、〈生産活動が可能でありながらもそれに従事せず教育を施される時間を過ごす者たち〉とした。少女は、幼女と成熟した女性の境界に跨る、アブジェクトな存在なのである。本稿が注目する少女表象と、フェミニズム・アートは、アブジェクトを扱うという点で共通して

いる。両者は表現方法が明らかに異なっているが、主体的な芸術表現であり、だからこそアブジェクトが表れるのであった。

第二章では、少女論のパイオニア的存在である本田和子の論を再評価した。本田は、「繭」に籠り、「宙吊り」の時間を過ごすのが少女であると述べた。本田の少女論は、「繭」に籠る少女を否定しないため、女性たちの社会進出の足枷となる可能性を有し、1980 年代、フェミニズム的に批判された。本章では、女性の多様な生き方がある程度肯定されている現在の視点で、本田の少女論を、クリステヴァによる、女性の主体的言語を模索する挑戦と近接するフェミニズム的挑戦と評価した。

第三章では、本田が少女の「徴」と論じた「リボンとフリル」に代表されるような、「少女趣味」が、現代、恐ろしく不気味な少女表象に援用されている点に注目した。社会の周縁で発展し、独自性を持った「少女趣味」は、少女たちが夢見ることで、自身を表現する「ロマンス」の世界である。「少女趣味」を、アブジェクトな少女表象に援用する芸術家の言葉を参照すると、そこに描かれた「少女趣味」は、芸術家自身の有する幼児性の表れであることが明らかとなる。幼児性とは、芸術家の有する「社会とのズレ」の感覚を指している。彼女（彼）らの、「社会とのズレ」の表現は、表面的には政治性を帯びてはいないが、われわれの信ずる秩序や法への疑念を促す。

第四章では、日本美術における少女表象の変遷を捉え、さらに現代の少女表象における主体性を、フェミニズム・アートとの比較で明らかにした。アブジェクトが強調された、2000 年頃からの少女表象は、これまでの、洋画や日本画、雑誌や商業広告、また、現代の「アニメ的」少女表象とも異なっている。鋭い視線でこちらを睨み付ける現代の少女は、権威や秩序に反発心を露わにしている。このような作品は、主に女性の芸術家によって描かれている。芸術家たちは、少女の可愛らしさの、その奥にある内面を主体的に描くために、血や内臓というモチーフを活用するのである。

第五章では、澁澤龍彦の「少女コレクション序説」に、フェミニズムの視点から批判を加えつつ、現代の視点から美学的少女論として捉えなおした。澁澤によって、少女の清純さや明るさとは異なる側面があぶり出された点は評価に値する。澁澤は、少女を「純粋客体（オブジェ）」であると述べた。その少女の「純粋客体（オブジェ）」性を援用するのが、日本の現代芸術における、「アニメ的」少女表象である。しかし少女期を生きた芸術家たちは、澁澤とは異なり、少女を、血の通った存在と捉えている。芸術家が、自身と少女を重ね合わせ、主体的な少女を描こうとするからこそ、少女はアブジェクトとして描かれるのである。

少女期は、少女マンガや少女小説に表現されている通り、曖昧な心情を意識する期間でもある。第六章では、その曖昧さに焦点を定め、曖昧さが表現された作品を分析した。本稿で挙げた芸術家たちは、曖昧なものを肯定的に扱う。少女の有する言語化の困難な複雑かつ曖昧な心情や感覚は、芸術家自身の経験によって主体的に描き出されていた。曖昧さを強調する独特な表現は、われわれの有する少女性を刺激する。さらには、われわれも、少女同様にアブジェクトな存在なのだと突きつけてくるのである。

以上の全六章を通じて明らかとなったことを、次に四点にまとめる。

一つ目は、少女はアブジェクトであるということである。少女の歴史性と社会性を踏まえると少女は境界に佇む中間的存在でありアブジェクトである。クリステヴァが、アブジェクトの例として挙げたのは、体液や汚物のような、明らかに「おぞましい(disgust)」ものであった。少女は一見、それらとは異なっているようにみえる。あくまで他者とし、外側だけを眺めれば、少女は可愛らしく無害な存在である。しかし、その可愛らしさに隠された、「おぞましい」アブジェクトが少女にはあるのであった。

二つ目は、近年やっと主体性を有する少女が描かれるようになったということである。これまで少女は、主に成人男性の視点から描かれていたため、男性や国家にとって理想的に表象されていた。しかし、フェミニズムの成果もあり、女性を含むマイノリティが芸術家として活躍できるようになった。彼女（彼）らは、少女を他者としてでなく、自らと結び付け、捉える。そのため、少女表象に主体性が表れてきたのである。

三つ目は、このような主体性を有する少女表象を論じる際に、本田の少女論は有効であるということである。主体性を有する少女表象は、少女を他者や人形とする視点では、十分に論じることができない。もちろん本田も、少女の異人性から少女論を始めてはいる。しかし、2000 年頃からの少女表象と本田の少女論は、自身の経験を踏まえていることと、「少女的なもの」を棄却せずに主体性を述べているという共通項があるのである。

四つ目は、主体的な少女表象においては、少女のアブジェクトが強調されるということである。アブジェクトは、内側と外側の境界にある。内側から発せられる少女の内面に迫れば、その内側のものは外に表出する。少女の可愛らしさという外側をなぞるのではなく、言語化困難な曖昧さや、複雑な内面を描こうとするために、芸術家たちは、表現方法を模索している。それは、アブジェクトないしアブジェクシオン理論のように、理論家や哲学者が挑んだ混沌とした領域へ、芸術家が芸術表現でもって挑戦しているということとなる。その挑戦的側面に少女表象の芸術的価値があるのである。